東方學報 京都第 97 册（2022）：480-449 頁

畫紋帶神獸鏡の東傳

―― 型式と鉛同位體比からみた九子派の動態 ――

岡　村　秀　典

1　廣漢派の創作した神獸鏡
2　三段式神仙鏡と九子派の出現
3　九子派の模作した畫紋帶神獸鏡
4　畫紋帶對置式神獸鏡の創作
5「九子」畫紋帶神獸鏡の鉛同位體比分析
6　四川盆地における古代青銅器の鉛同位體比
7　九子派の工房は東方に移轉したか
8　餘論 ―― 京都府椿井大塚山古墳出土「九子作」鏡の歴史的意義 ――

1　廣漢派の創作した神獸鏡

長江上流域の四川盆地は鑛產資源に富み，前 2 千年紀には獨特の青銅器をもつ三星堆文化や金沙文化，前 1 千年紀には巴蜀文化が榮えた。漢文帝のとき富豪の鄧通が蜀の嚴道の銅山を開發して鑄造した銅錢は天下に流通したとされ[1)]，中部の彭山縣や南部の西昌市からは五銖錢や王莽錢の鑄型のほか，制造番號や重さを刻んだインゴット（銅素材）が多數出土している。また，後漢前期には「蜀郡西工造」銘をもつ宮廷用銅器が郡管轄の工房で制作されたが，1 世紀後葉を境に民間でつくられた青銅器が多くなり，その代表的な銅容器に「蜀郡董氏」や「蜀郡嚴氏」などの銅盂（洗）がある〔岡村 2008〕。

この中で 2 世紀はじめに廣漢派の鏡工が環狀乳神獸鏡を創作する。それは後ろを振り向く獸の背中に神仙が坐り，獸の肩と腰に環狀の乳があるところから命名された。神像は西王母・東王公の陰陽二神と琴を彈く伯牙の 3 神で，獸は天を支える柱の維剛（巨）を口に銜え，內區外周に半圓方形帶，一段高くなった外區に銘文帶を配している。作者を「吾作」と一人稱代名詞で記した銘文が多いが，南陽市博物館藏の元興元年（105）環狀乳

1）『史記』佞幸列傳。『史記正義』は『括地志』に「雅州滎經縣北三里有銅山，卽鄧通得賜銅山鑄錢者」とあるのを引いて「案，滎經卽嚴道」という。滎經は雅安市の西南にある。

神獸鏡には「廣漢西蜀造作尙方明竟」とあり〔崔 1982〕,「廣漢西蜀」を商號とする工房にて「尙方明鏡」が制作されたことがわかる〔楢山 2002〕。「尙方」は宮廷用品の制造を管掌する中央官廳であり,「尙方明鏡」の制作を民間の「廣漢西蜀」工房に發注していたのである〔岡村 2011〕。

元興元年にはまた「廣漢西蜀造作尙方明竟」銘の獸首鏡が制作されている。浮彫で圖像を表現する神獸鏡とちがって,獸首鏡は影繪ふうの平彫で獸面紋をあらわし,內區と外區の高低差がほとんどないのが特徵である。

廣漢派には「廣漢西蜀」のほかに個人名を冠した工房もあった。たとえば,河南省新鄉市金燈寺 47 號墓から出土した 2 世紀中頃の八鳳鏡には「董氏造作尙方明竟」(集釋 721)という銘文がある。この「董氏」は上述の銅盂を制作した「蜀郡董氏」と同じ工房かもしれない。そのような個人工房でも「尙方」から「明鏡」の發注を受けていたのである。八鳳鏡も獸首鏡と同じような平彫で對向する鳥をあらわし,銘文はそれを「八雀 相い向かうは古始に法る」と說明する。廣漢派には「董氏」のほかにも「吳氏」や「暴氏」などの工房があったが,いずれも作例は少なく,小規模な個人經營だったのだろう。

160 年代,廣漢派は外區に銘文帶をもつ三神三獸鏡から畫紋帶四神四獸鏡を創作する。上海博物館藏の永康元年(167)四神四獸鏡は,西王母・東王公・伯牙に辟邪の役割をもつ黃帝を加えた四神を主像とし,外區の畫紋帶には雲車に乘る天神の太一と日神・月神の出行によって天の運行をあらわしている。

以上の神獸鏡・獸首鏡・八鳳鏡の 3 種が廣漢派の創作した代表的な鏡である。そのすぐれた藝術性が評價され,中央官廳の尙方から宮廷鏡の制作が委託されたのであろう。後漢後半期において「尙方明鏡」をうたう作品は廣漢派のほかにつくられていない。廣漢派はそれらをもっぱら中央に納品したためか,廣漢派の鏡は地元の四川省內からは一面も發見されていない。

2　三段式神仙鏡と九子派の出現

四川盆地から關中一帶では,2 世紀後半に三段式神仙鏡が流行する。それは內區を水平線で 3 段に區畫し,神仙や聖人像を雛壇式に配置した鏡である。鈕の周りに圖像をめぐらせていた從來の鏡とはちがう斬新な配置であり,天界と仙界に加えて人界を群像だけで表現したことも革新的である。この三段式神仙鏡について森下章司〔2012〕は,圖像と銘文の變化をもとに次の 3 類に編年した。

a 類は上段に北辰・北斗を中心とする天界,中段に西王母と東王公の陰陽二神,下段に堯・舜・蒼頡・神農などの聖人をあらわし,銘文にそれを記したもの。湖北省荊州博物

圖 1　三段式神仙鏡　1：湖北省荊州博物館所藏「黃盖作」鏡，2：西安市常家灣 1 號墓出土「九子」鏡〔西安市文物保護考古所 2009：圖 192〕，3：西安市壩橋 457 號墓出土「九子」鏡

館藏「黃盖作」鏡（圖 1 の 1）の銘文は，上段の圖像を「一母婦坐子九人，翠盖覆貴敬坐盧」，中段の圖像を「東王父・西王母哀萬民兮」，下段の圖像を「堯賜女爲帝君」と說明する（集釋華西 01）。また，綿陽市何家山 1 號墓出土鏡には「余造明鏡，九子作容。翠羽祕盖，靈鳩臺杠。調刻神聖。西母東王。堯帝賜舜二女，天下泰平。風雨時節，五穀孰成。其師命長。」（集釋華西 02）という四言句の銘文がある。これに類似するのが邛崍市羊安鎭出土鏡であり，「余造明鏡，九子作，上刻神聖。西母東王。堯賜舜二女，天下泰平。禾穀孰成。」という銘文がある（集釋華西 03）。その第 2 句は何家山 1 號墓鏡の「九子作容」の「容」が脫落したもので，「九子」の作をいうのではない。

b 類は圖像が簡略化し，銘文の冒頭に「九子明竟」や「九子竟」と記した鏡が出現する。この「九子」とは，本來は a 類の「黃盖作」鏡にいう「一母婦」（斗母）の「子九人」，すなわち北辰・北斗を意味するが，同じ工房の作とみられる方銘獸紋鏡（今照 128）に「九子家作兮」という銘文があるため，この段階に「九子」は作鏡工房の商號になったことがわかる。西安市常家灣 1 號墓出土「九子」鏡〔西安市文物保護考古所 2009〕は，圖像が簡略だが，中段の西王母と東王公の背後に人頭蛇身の月神と日神がともなっている（圖 1 の 2）。內區外周に半圓方形帶をめぐらし，その方格には 2 字ずつ「九子竟，淸而明。利父母，便弟兄。夫妻相宜，長保君，長生樂未央。」という銘文を配している。西安市壩橋 457 號墓出土鏡（陝西 76）の圖像構成も常家灣 1 號墓例に類似するが，下段の建木と聖人の圖像が明瞭で，半圓方形帶に獸紋を配し（圖 1 の 3），方格に 2 字ずつ入れた銘文は「九子竟兮□□，□□母，便弟兄。」とある。このほか西安市咸寧路からも b 類の「九子」鏡が出土している。

c 類は圖像がより簡略化し，銘文から作者名が脫落して吉祥句のみとなる。關中から 2

面出土しているほか，日本の群馬縣前橋天神山古墳から 1 面出土している。

森下章司〔2016a：27 頁〕はその後，綿陽市白虎嘴 19 號墓出土の三段式神仙鏡を調査し，圖像表現は a 類に屬すが，「九子明鏡□甚工。左龍右虒辟…，服者冨昌。冨□高遷，位至卿公。壽如金石，福祿是從。統德序道，長宜侯王兮。」と釋讀される銘文の冒頭に「九子」とあるのは b 類の特徵であるから，兩類の過渡的な段階に位置づけた。そのうえで a 類は白虎嘴「九子」鏡を含めて四川盆地から 4 面出土し，b・c 類は西安周邊に集中しているため，2 世紀後葉に四川から「陝西に生產の中心が移動した」〔同 35 頁〕と考えた。この「九子」工房と a 類の「黃盖作」鏡や「余造」鏡の工房との繼承關係は不明だが，三段式神仙鏡が a 類から b 類に變化する段階に「九子」工房が創設され，三段式神仙鏡にはじまる鏡群のもっとも中心的な作鏡工房に發展したことから，これらを九子派と總稱することにしよう。

3　九子派の模作した畫紋帶神獸鏡

廣漢派と九子派は四川盆地にて同時期に竝行して鏡工房を開いていたが，廣漢派の鏡は中央に多く納品されたのに對して，九子派の鏡は地元と長安周邊に流通し，兩派の交流も限定的であった。とはいえ，三段式神仙鏡の制作にあたって環狀乳神獸鏡の圖像紋樣や銘文が參照された形跡がある。たとえば三段式神仙鏡 a 類の何家山鏡をみると，「余造明鏡」ではじまり「其師命長」で終わる四言句の銘文（集釋華西 02）は，明らかに廣漢派の體例に倣っている。もっとも廣漢派の「吾作明竟」をあえて「余造明鏡」に改めたところに九子派の矜持がうかがえる。さらに三段式神仙鏡 b 類になると，內區外周に神獸鏡の半圓方形帶を採り入れ，西安市咸寧路鏡などは中段の神仙の代わりに獸を配している。とくに新たに設立された「九子」工房では，a 類から b 類への過渡期において，廣漢派の神獸鏡を模倣した作品が試作される。

圖 2 の①は廣漢派の永康元年（167）畫紋帶環狀乳神獸鏡である。西王母と東王公は正面向き，伯牙と黃帝は顏をやや橫に向け，獸はすべて顧首形で，兩眼は丸く見開き，維剛を口に銜えている。琴を彈く伯牙の左に淚を拭う鍾子期，右に神仙像があり，林巳奈夫〔1973〕は右の像を成連先生に比定する。このタイプの鏡を模作したのが②と③の「九子」鏡である。②は京都國立博物館新收鏡，③は安徽省舒城縣八里雲霧村出土鏡（六安 105）であり，半圓方形帶の半圓に渦紋，方格に 1 字ずつ次の銘文を入れている。

② 九子明鏡，長利作容。服者富，師命長。

③ 九子作竟自有紀，富炅矣。（集釋吳 01）

②鏡の銘文は廣漢派の四言句を改變したもの。圖像をみると，①鏡など廣漢派の神獸鏡

では陰陽二神の肩から線描の氣が發出するが，「九子」鏡の２面はそれが帶狀の蕨手表現になっている。②鏡の氣は左右１本ずつで，③鏡では左右２本ずつになり，以後それが定式化する（圖１の２・３參照）。陰陽二神はまた，顏をやや横に向け，西王母は髪際をあらわすのが「九子」神獸鏡の特徵である（圖３の１・２）。②鏡の副像には伯牙・鍾子期（同3）と蒼頡・神農（同4）を配し，③鏡の副像は黄帝と神農それぞれに人頭鳥身の神がともなっている。③鏡の獸は４頭とも同形だが，②鏡では西王母の右側の１頭が側視形である。モデルとなった鏡が②鏡と③鏡でちがっていたのだろう。廣漢派の環狀乳はドーナツ形で，周圍に花辨狀の線紋をもつが，「九子」鏡の２面は圓環狀に簡素化している。これも「九子」神獸鏡の特徵である。なお，②鏡の鍾子期は大きくあらわされ，その部分の環狀乳が省略されている（同3）。また，③鏡は鈕上に龍紋を刻むが，それは廣漢派の龍紋鈕をまねたものである。全體として③鏡は②鏡より形式化しており，②鏡をＡ類，③鏡をＢ類としておこう。

160年代に廣漢派は西王母・東王公・伯牙からなる三神三獸鏡に黄帝を加えて四神四獸鏡を創作した。「九子」鏡の２面はその四神四獸鏡をモデルとしたものだが，それぞれ伯牙や黄帝に代えて三段式神仙鏡の下段にあらわしていた聖人の蒼頡と神農を採り入れた。模作とはいえ②鏡の圖像表現は生動的で，その藝術はモデルとなった廣漢派の神獸鏡をも凌駕している。ただし，①鏡など廣漢派の環狀乳神獸鏡は內區主紋の獸や外區の畫紋帶が反時計回りであるが，②鏡は時計回り，③鏡は反時計回りになっている。

「九子」工房ではまた畫紋帶同向式神獸鏡を模作している（圖4）。①はラグレウス Jr. 氏藏「吾作」鏡〔Dewar 1994〕，②は劉東氏藏「九子」鏡（今照121），③は兵庫縣立考古博物館藏千石コレクション156「九子母」鏡であり，③鏡は鏡背の全面に鍍金している。同向式神獸鏡は三段式神仙鏡と同じように內區の圖像すべてが同一方向を向いた配置になるが，水平の區畫線がなく，鈕の上方に伯牙・鍾子期らと２體の獸，左右に西王母と東王公，下方に黄帝と２體の獸を配置する四神四獸がふつうである。ところが①鏡と②鏡は鈕の下に胡坐をかく裸形の怪獸を配している。王趁意氏藏「雒家作」畫紋帶同向式神獸鏡（今照127）も主像は西王母・東王公・伯牙・裸形怪獸の組合せであり，森下章司〔2016b〕はその怪獸を辟邪の役割をもつ蚩尤に比定している[2)]。③鏡はその代わり建木の左右に蒼頡と神農を配置している。この３面は神獸鏡に黄帝が登場する直前の段階，すなわち160年代における四神四獸鏡の創作段階に位置づけられよう。

2） 同じ怪獸形は孔震氏藏「雒家作」盤龍鏡（今照131）などにもみえる。「雒家作」鏡の確かな出土例はなく，制作地などは不明だが，「雒家」は廣漢郡治の所在した雒縣にちなむ家號であるならば，廣漢派や九子派に近いところで活動していたことになる。

圖 2　畫紋帶環狀乳神獸鏡　①：上海博物館藏永康元年（167）鏡（森下章司氏撮影），②：京都國立博物館藏「九子」鏡，③：安徽省舒城縣八里雲霧村出土「九子作」鏡（六安 105）

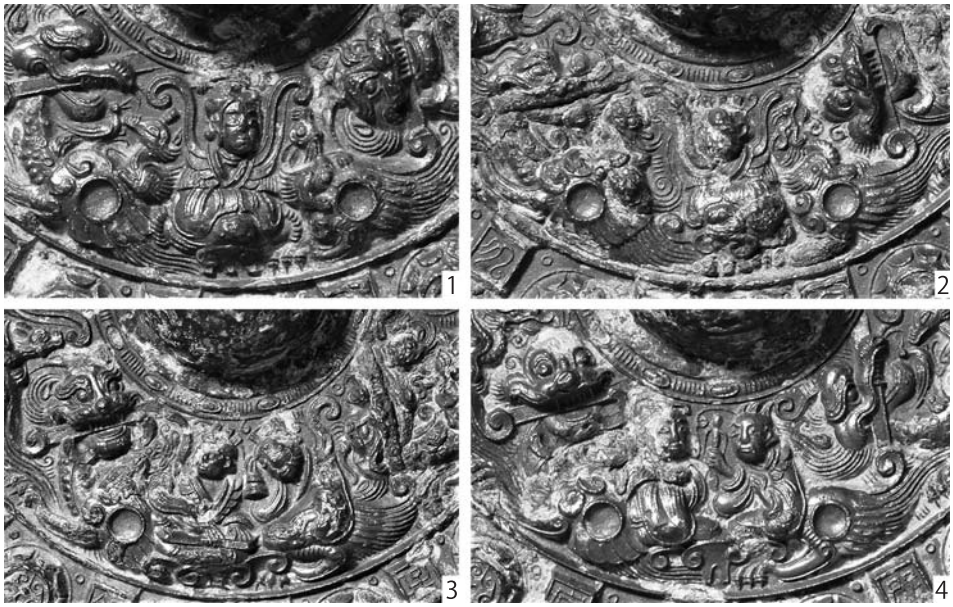

圖３　②京都國立博物館藏「九子」環狀乳神獸鏡の神像

まず圖像紋様を比較すると，①「吾作」鏡と②「九子」鏡は酷似している。異なるのは，半圓方形帶の半圓に①鏡は花辨紋，②鏡は獸紋を配し，外區の畫紋帶が①鏡は時計回り，②鏡は反時計回りであることぐらいである。これに對して③「九子母」鏡は，鈕の下に蒼頡と神農を配置し，①鏡と②鏡の神像は鈎形に屈折する維剛（巨）に直に坐るのに，③鏡の西王母と東王公にはいわゆる龍虎座がともない，茸形の雲氣上に坐っている。その雲氣紋は維剛の變化したものだが，この表現は三段式神仙鏡に由來する（圖１參照）。また，３面とも鈕の上方に伯牙・鍾子期・成連先生の３體がそろうが，①鏡と②鏡の鍾子期は伯牙の右に坐り，③鏡では左に坐っている。伯牙と鍾子期の表現（圖５の１）を仔細にみると，①鏡と②鏡は永康元年鏡（圖２の１）など廣漢派のそれに近似し，③鏡は「九子」環狀乳神獸鏡と酷似する（圖３の３）。もっとも３面とも西王母は雙髻に玉勝を戴き，東王公は三山冠をかぶり，肩から發出する氣は東王公の左肩を除いてすべて線狀の表現になっている。この段階では氣を帶狀にあらわす「九子」獨自の表現が確立していなかったのだろう。紋様についてみると，①鏡と②鏡は捩紋乳を鈕の四方と主紋の上下左右端に配置するが，③鏡はそれを圓錐形の乳と圓環紋に改變している。③鏡の畫紋帶は①鏡と同じ時計回りで，その外側は①鏡と②鏡は流雲紋帶，③鏡は菱雲紋帶をめぐらせている。

次に銘文を比較しよう（表１）。３面とも田字形に區畫した方格に四言句を入れるが，③鏡は作者を「九子母」の３字としたため，第１・第２方格が「九子母明」「鏡福祿從」という不規則な字配りになっている。②鏡や白虎嘴「九子」三段式神仙鏡では「九子明鏡」，

①

②

③

圖 4　畫紋帶同向式神獸鏡　①：ラグレウス Jr. 氏藏「吾作」鏡〔Dewar 1994：no. 55〕，②：劉東氏藏「九子」鏡（今照 121），③：千石コレクション 156「九子母」鏡

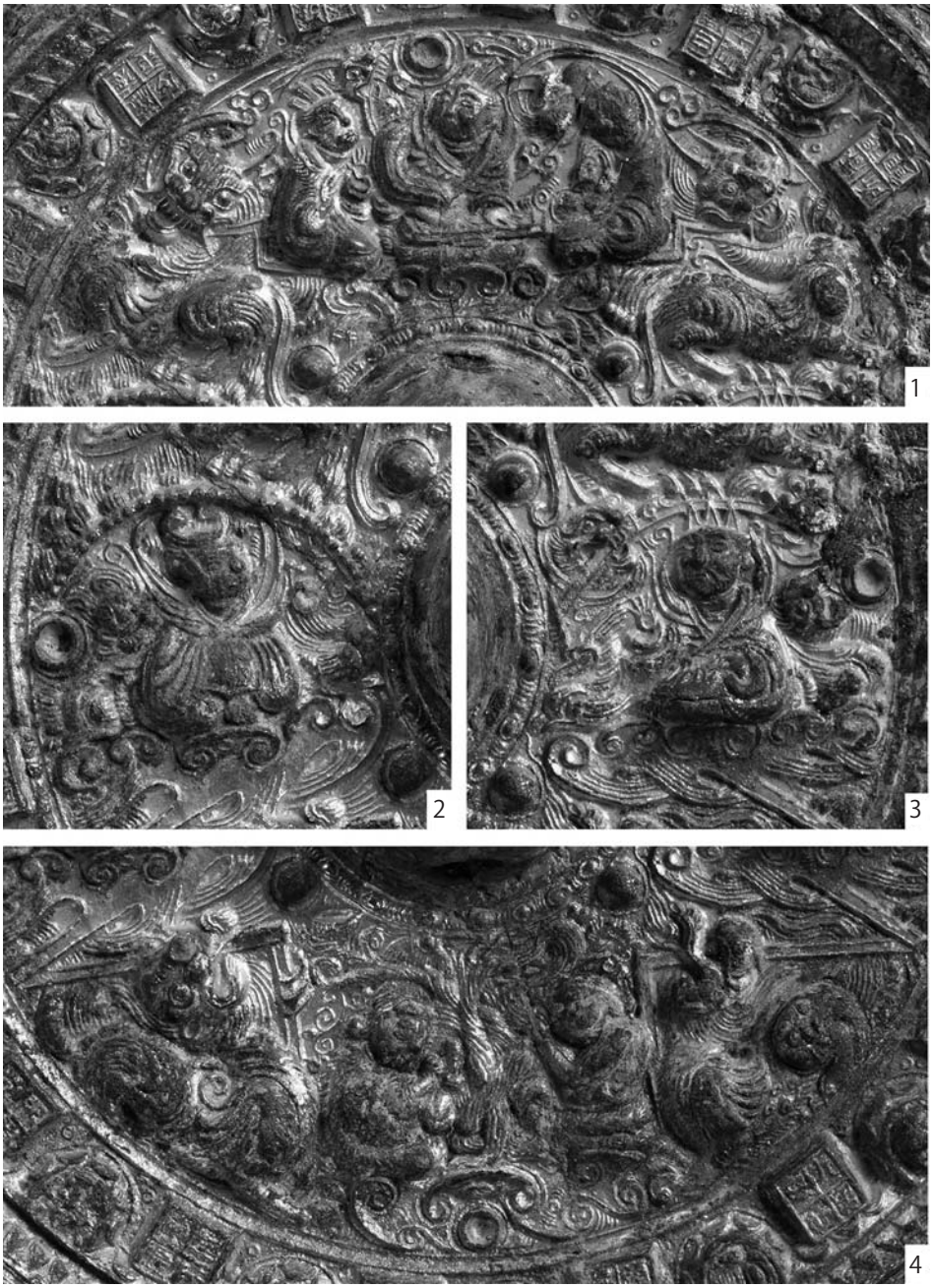

圖 5　③千石コレクション 156「九子母」同向式神獸鏡の神像

表１　畫紋帶同向式神獸鏡の銘文比較（太字は３面に共通する語句）

	①「吾作」鏡	②「九子」鏡	③「九子母」鏡
1	吾作**明鏡，福祿**是**從**。	九子**明鏡，幽湅金**剛。	九子母**明鏡，福祿從**。
2	**奉□三皇，其師命長**。	四氣象元，六合設張。	**奉□三皇。其師命長**。
3	**服者公卿**。子孫番昌。	造作刑暮，周刻萬彊。	**服者公卿**。子孫番昌。
4	**衆神見容**。敬奉賢良。	**白牙陳樂，衆神見容**。	**白牙陳樂，衆神見容**。
5	**白牙陳樂，幽湅金**商。	統德序道，**奉侍三皇**。	統德序道，敬奉賢良。
6	百精竝存，咸得所願，	通丞五行，**福祿**是**從**。	**幽湅金**商。百精竝存，
7	曾年益壽，富貴安寧。	**服者公卿。其師命長**。	咸得所願，□□□□，
8			曾年益壽，富貴安寧。

常家灣や壩橋の三段式神仙鏡では「九子竟」としているから，工房の商號が定まらない段階であったのだろう。また，３面とも類似の四言句を用いているが，全體としてみると，③鏡は②鏡より①鏡に近似し，①鏡→②鏡→③鏡の順に模倣されたのではなく，①鏡から②鏡と③鏡の２系統に分かれたか，未知の鏡をモデルに①鏡・②鏡・③鏡の３系統に分かれたものと考えられる。とくに①鏡は，銘末にあるべき「其師命長」を第２行に挿入し，「幽湅三商」を「幽湅金商」と改めていることからみれば，廣漢派直傳の作ではなかった可能性が高い。とはいうものの，この四言句は九子派が創作したとは考えがたい。上述のように，先行する三段式神仙鏡ａ類は傳統的な七言句またはそれを四言句に改變した銘文であり，何家山「余造」鏡だけが廣漢派に由來する「其師命長」を用いていたからである。「九子」工房の開業後，白虎嘴「九子」三段式神仙鏡では七言２句に②・③鏡と共通する「服者冨昌。冨□高遷，位至卿公。壽如金石，福祿是從。統德序道，長宜侯王兮。」という四言７句を接續しているから，これらは「九子」工房の創業期に廣漢派の體例に倣って制作されたものであろう。

三段式神仙鏡ａ類の銘文が鏡の圖像を説明していたことからみれば，上の四言句のうち３面に共通する「白牙陳樂」「衆神見容」は，上段にあらわされた伯牙彈琴によって衆神が出現することをいうのかもしれない。しかし，伯牙彈琴像は三段式神仙鏡ａ類に登場することがなく，西王母と東王公が銘文にあらわされていないことから，圖像に關わりなく定型句としてそれを採用したにすぎないのだろう。

森下〔2016a：36-37 頁〕は③「九子母」鏡から①「吾作」鏡・②「九子」鏡への紋様變化を想定するが，以上のことから，①鏡は環狀乳神獸鏡を制作していた廣漢派が三段式神仙鏡をヒントに創作したもの，ないしはその模倣であり，「九子」工房の創業期にこのタイプの鏡を忠實に模倣したのが②鏡，自己流にアレンジしたのが③鏡であったと考えるのが妥當であろう。ここでは「九子」作を明示した②鏡をＡ類，それに改變を加えた③鏡をＢ類としておこう。

廣漢派の環狀乳四神四獸鏡を模倣した圖２の②・③「九子」鏡と圖４の②・③「九子」

同向式神獸鏡との竝行關係について圖像構成や紋様表現からみると，「九子」環狀乳神獸鏡 A 類は同向式神獸鏡の模作よりわずかに後れたと考えられるが，これら「九子」工房における畫紋帶神獸鏡の模作は，廣漢派が四神四獸鏡を創作する 160 年代に竝行して着手されたのであろう。

4　畫紋帶對置式神獸鏡の創作

對置式神獸鏡とは，鈕を挾んで對置された西王母と東王公の左右にそれぞれ獸が兩神に向き合う配置の鏡である〔樋口 1979：227-234 頁〕。獸の後ろは 2 神の對坐が多く，伯牙・鍾子期，蒼頡・神農，黃帝・句芒などが配されている〔林 1973〕。「九子」工房では三段式神仙鏡につづいて對置式神獸鏡が制作されたが，對置式神獸鏡は主に長江中下流域から出土するため，森下章司〔2012〕は「華西から一部の製作工人が江南に移動し，新たに生み出された鏡式が畫紋帶對置式神獸鏡」と考えた。その後，上述した「九子」畫紋帶神獸鏡が明らかになったことにより，神獸鏡の模作による試行錯誤を經て對置式神獸鏡が創作されたプロセスが明らかになってきた〔岡村 2017：160-166 頁〕。

圖 6 には九子派の畫紋帶對置式神獸鏡を例示した。これを初現的な①鏡と②「三王作」鏡の A 類，定型化した③～⑤「九子作」鏡の B 類，江南の吳で模作された⑥「吳造」鏡の C 類に分ける。

A 類の①鏡は西安市廣豐公司 14 號墓の出土で，田字形に區畫した方格內の銘文は，銹のため未讀字が多いが，「東□封□，服者富昌，白牙陳樂，百年見客（?），流得序□，奉初三皇，其師萬疆，福祿自從，作吏高官，位至卿公，□□相□，□□□□，□□□母，木（?）日西王」と讀まれている〔西安市文物保護考古所 2009〕。作鏡者は不明だが，表 1 の畫紋帶同向式神獸鏡と共通する語句が多い。主像の陰陽二神は龍虎座に坐り，肩から發出する蕨手狀の氣は左右 2 本ずつである。副像は圖の左に伯牙と鍾子期，右に建木を挾んで蒼頡と神農が對坐している。後者の圖像は明らかに三段式神仙鏡 a 類のそれを踏襲し，九子派の作品と考えられる。②は筆者が 1982 年に重慶市博物館で撮影した成都地區出土鏡で，16 個の方格に 1 字ずつ「三王作鏡，調刻神聖。服者公卿。其師萬彊。」という銘文がある。作者の「三王」は九子派の工房のひとつで，「三王」の上下横畫の兩端を己字形に屈曲させる特徵をもつ〔森下 2011〕。「調（雕）刻神聖」は何家山「余造」三段式神仙鏡 a 類にもあり，「其師萬彊」は①鏡と共通する。主像表現は①鏡と同じで，副像は圖の右に伯牙・鍾子期・成連先生，左に蒼頡と神農が對坐している。成連先生を加えた伯牙の 3 像は廣漢派に倣ったものである。①・②鏡の 4 獸はすべて維剛を銜えるが，②鏡の維剛は細い雲氣のように簡略化している。①・②鏡の半圓方形帶の半圓は渦紋を

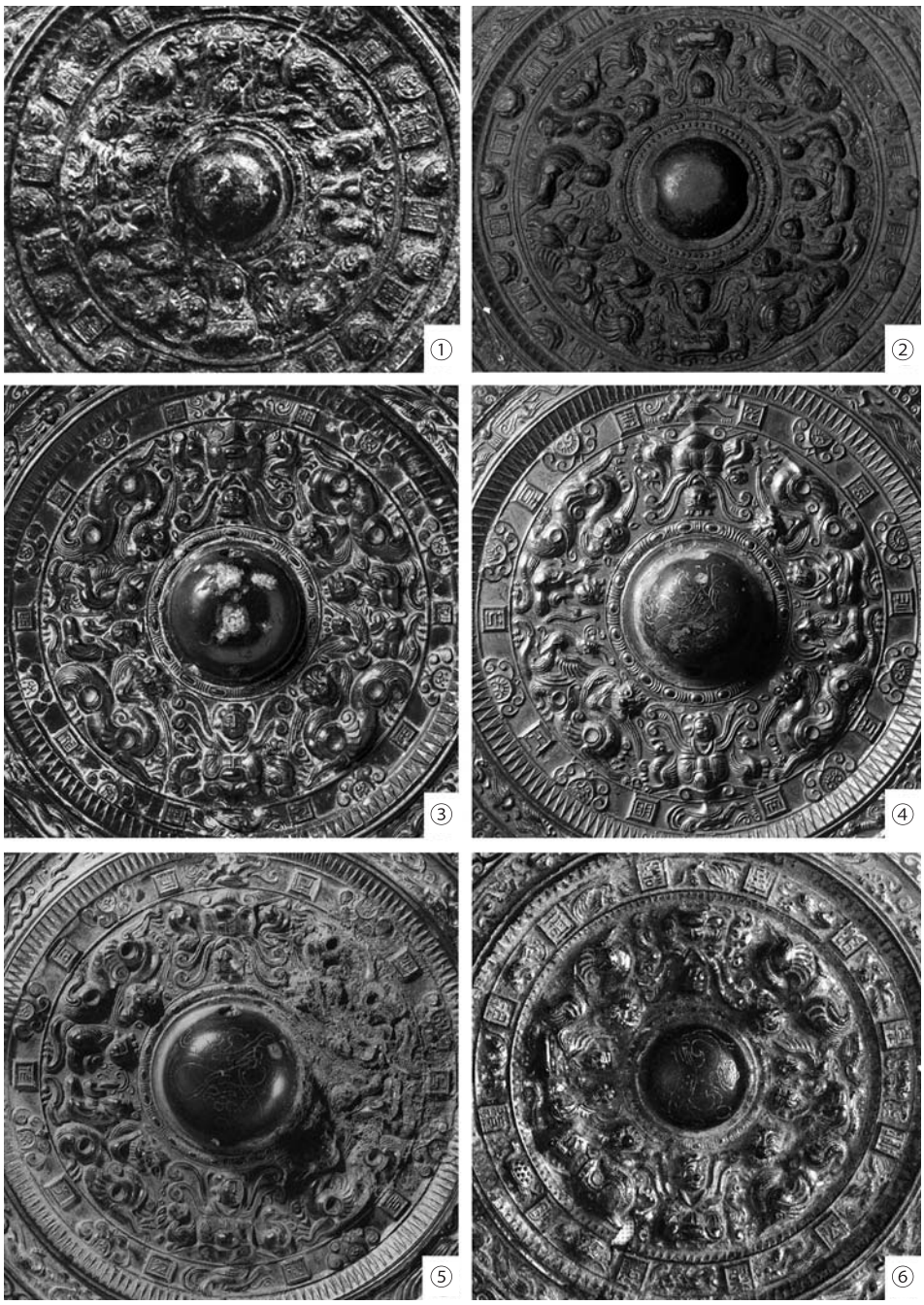

圖 6　畫紋帶對置式神獸鏡　①：西安市廣豐公司 14 號墓出土鏡〔西安市文物保護考古所 2009：彩版 25-4〕，②：重慶市博物館藏「三王作」鏡，③：京都府椿井大塚山古墳出土「九子作」鏡，④：千石コレクション 155「九子作」鏡，⑤：鄂州市鄂鋼 544 工地出土「九子作」鏡（鄂城 95），⑥：鄂州市塗鎭公社毛壙大隊出土「吳造」鏡

圖 7　④千石コレクション 155「九子作」對置式神獸鏡の神像

もち，②鏡の神像の外方にある 4 か所の半圓には同向式神獸鏡の①・②鏡に用いられた捩紋乳がほどこされている。外區の畫紋帶は①・②鏡とも時計回りである。

この A 類は，三段式神仙鏡を制作していた九子派が，廣漢派の畫紋帶神獸鏡をモデルに試行錯誤のうえ創作した對置式神獸鏡の初現的な型式であろう。管見におよんだのは西安と成都から出土した 2 面のみだが，圖像の構成と表現が共通する三段式神仙鏡 a 類・b 類の分布と重なることから，九子派によって制作された可能性が高い。①鏡の圖像構成と銘文は同向式神獸鏡の③「九子母」鏡に近いが，圖像表現には九子派の特色がより強くあらわれ，とくに②鏡の圖像と紋様の表現は環狀乳神獸鏡の②・③「九子」鏡に近い。制作年代は 160 年代を上限とする 2 世紀後葉であろう。

B 類の③は京都府椿井大塚山古墳出土鏡，④は兵庫縣立考古博物館藏千石コレクション 155 鏡，⑤は湖北省鄂州市鄂鋼 544 工地出土鏡（鄂城 95）であり，④・⑤鏡は背面に鍍金がある。主像の陰陽二神は山形の雲氣上の龍虎座に坐り，左右の肩から蕨手狀の氣が 2 本ずつ發出している（圖 7 の 1・2）。副像は④・⑤鏡に伯牙と鍾子期（同 4），③・④鏡に黄帝と玄女（同 3）が配されている。副像から蒼頡と神農など三段式神仙鏡に由來する聖人が消失し，陰陽二神と伯牙・黄帝からなる四神四獸鏡へと變化する段階である。獸の肩と腰が環狀乳を呈し，その形は環狀乳神獸鏡の②・③「九子」鏡と同じである。半圓方形帶には西王母の下に鳥，東王公の下に龜が配され，半圓の內外に唐草紋がほどこされている。方格には 1 字ずつ次の銘文がある。

③ 九子作明如光。服者侯王。

④ 九子作兮而明。工兮吉羊。

⑤ 九子作世而工。服者吉利。

3 面とも安徽省舒城出土の環狀乳神獸鏡（圖 2 の③）と同じように「九子作」とある。鍍金した④・⑤鏡は鈕上に龍紋を刻み，外區の畫紋帶は 3 面とも反時計回りである。

鄂州市からはまた，同類の「九子」鏡（鄂城 102）と「三王作」鏡（鄂城 103）が出土している。兩鏡には，獸の肩と腰の環狀乳，陰陽二神の下の半圓方形帶に配された鳥と龜，鈕上の龍紋がなく，B 類の亞種としておこう。この鄂城 102「九子」鏡と同銘でほぼ同じ圖像紋様をもつ例が貴州省平壩縣馬場 37 號墓から出土している〔貴州省博物館考古組 1973〕。椿井大塚山鏡と同じように遠隔地に運ばれた數少ない例のひとつである。

C 類の⑥は鄂州市塗鎭公社毛壙大隊出土の鍍金「吳造」鏡（鄂城 96）で，方格に「吳造明鏡，神聖設容。服者卿公。」（集釋吳 04）という銘文があり，吳郡（縣）にて制作されたものである。「神聖」の語はめずらしいが，何家山「余造」三段式神仙鏡 a 類や對置式神獸鏡 A 類の②「三王作」鏡に用いられていた。神獸の浮彫表現は量感に富み，B 類とは微妙なちがいがある。しかし，陰陽二神は龍虎座に坐り，兩肩から蕨手狀の氣を 2 本ず

つ發出し，西王母の顔に髪際をあらわす特徴はＢ類と同じである。副像には伯牙・鍾子期と黄帝・玄女を配し，獸は口に細い維剛を銜えている。半圓方形帶との間に高い界圈を設け，半圓の代わりに獸紋を配している。外區の畫紋帶は反時計回りである。④・⑤鏡と同じように鈕上に獸紋を刻み，Ｂ類を模作したのだろう。類似の畫紋帶對置式神獸鏡（古鏡中 28 裏）には「吳郡趙忠所作」という鏡工名を記した銘文があり，これも吳派によるＢ類の模作と考えられる。

漢末に下ると，畫紋帶を銘帶に代えた對置式神獸鏡が會稽派によって制作される。第８節にみるように，鄂州市廢品收購站徵集の建安二十一年（216）「會稽所作」鏡（鄂州 144）や五島美術館藏の建安二十四年（219）鏡（五島 38）は，內區の主紋や半圓方形帶が吳派のＣ類ではなく九子派のＢ類を模倣している。つまり，九子派の對置式神獸鏡Ｂ類は漢末に吳派と會稽派に受容され，３世紀を代表する神獸鏡として繼承されてゆくのである。

中國出土のＢ・Ｃ類は多くが鄂州市周邊からの出土である。Ｃ類は吳派と會稽派の制作で，それぞれ江南の吳郡と會稽郡から運び込まれたものだが，Ｂ類は鄂州で制作された可能性がある。とくに鄂州の近くには先秦時代より銅の採掘がおこなわれていた銅綠山があり，221 年に孫權がここ鄂に遷都して武昌と改名してからは，泉屋博古館所藏の黄初二年（221）同向式神獸鏡に「武昌所作明鏡」，鄂州市出土の黄武六年（227）「會稽山陰作師鮑唐」重列式神獸鏡に「家在武昌，思其少」とあるように，會稽派の鏡工が武昌に移住し，さかんに神獸鏡を鑄造するようになったのである。また，鄂州市鄂鋼制氧站出土「黄武年十月」同向式神獸鏡（鄂州 179）には「會稽山会，造者西蜀郡本都里思子高」という銘文があり，吳の黄武年間（222-229）に蜀郡出身の鏡工が會稽山陰にて制作したことがわかる[3)]。長江下流域と中流域との交流だけでなく，上流域から中下流域へと鏡工が移動したことがうかがえる。

以上の鏡編年をまとめたのが表２である。新發見が今後に期待されるものの，現狀において九子派の活動は，創業期と發展期の２時期に區分される。

三段式神仙鏡ａ類の綿陽白虎嘴「九子」鏡は九子派創業期の作品であり，廣漢派に由來する四言句を銘文に採用している。「九子」が廣漢派の影響下に工房を立ち上げ，その畫紋帶神獸鏡をモデルに同向式神獸鏡や環狀乳神獸鏡を模作し，試行錯誤のうえ新たに對置式神獸鏡を創作した段階である。「九子」同向式神獸鏡Ａ類（圖４の②）はモデル鏡の忠實な模倣だが，Ｂ類の「九子母」鏡（同③）には三段式神仙鏡に由來する蒼頡・神農

3）「造者西蜀郡本都里思子高」を「造る者は西のかた蜀郡本都里の思子高なり」と訓讀し，鏡工の姓は「思子」，名は「高」で，五島美術館所藏の黄武五年（226）二月六日鏡の「楊州會稽山会安本里思子丂」と同一人物と考える〔岡村 2013〕。

表２　九子派の鏡の相對編年

<table>
<tr><th>九子派</th><th>三段式神仙鏡</th><th>同向式神獸鏡</th><th>環狀乳神獸鏡</th><th>對置式神獸鏡</th></tr>
<tr><td></td><td rowspan="3">a 類</td><td></td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">創業期</td><td rowspan="3">A 類
B 類</td></tr>
<tr><td rowspan="2">A 類
B 類</td><td rowspan="2">A 類
B 類</td></tr>
<tr><td>發展期</td><td>b 類</td></tr>
</table>

を配置し，圖像表現にも獨自色をあらわしている。建木の兩側に蒼頡・神農が對坐する同じ圖像は，西安市廣豐公司 14 號墓出土の對置式神獸鏡 A 類（圖 6 の①）にもあらわされ，田字形に區畫した方格に四言句の銘文を入れる手法も共通する。成都地區出土「三王作」對置式神獸鏡 A 類（同②）は，蒼頡・神農像から建木が消失し，方格に 1 字ずつ四言句を配しているが，伯牙の左右に成連先生と鍾子期が坐る廣漢派の影響が認められる。この「三王作」鏡に近い手法が「九子」環狀乳神獸鏡 A 類（圖 2 の②）にも認められ，依然として試行錯誤の段階にあったことがわかる。廣漢派が西王母・東王公・伯牙・黃帝の四神で構成される畫紋帶四神四獸鏡を創作するのが 160 年代であるから，九子派の創業はそれを上限とする 2 世紀後葉，およそ 160～170 年代と考えられる。

九子派の發展期は，三段式神仙鏡 b 類と定型化した對置式神獸鏡 B 類の段階である。安徽省舒城出土「九子作」環狀乳神獸鏡 B 類（圖 2 の③）は，龍紋鈕や環狀乳の特徵のほか，「九子作」とあるのが對置式神獸鏡 B 類と共通する。創業期につづく 180 年代の作であろう。九子派の作例は四川盆地から消失し，三段式神仙鏡 b 類は西安周邊に，對置式神獸鏡 B 類は鄂州にまとまって出土していることから，九子派は北と東に分かれて移轉した可能性が推測されている。それは三段式神仙鏡の a 類から b 類へ，對置式神獸鏡の A 類から B 類へと變化する時期であり，江北の舒城出土「九子作」鏡は東方移轉後の作品と考えるのである。それを鉛同位體比分析によって檢證してみよう。

5 「九子」畫紋帶神獸鏡の鉛同位體比分析

鉛同位體比によって青銅器原料の產地を推定する方法は 1960 年代にアメリカで開發され，ほどなくして日本でも分析に着手された。40 年以上にわたる研究により，東アジアの青銅器に關する鉛同位體比は ^{206}Pb を分母とする A 式圖を主に用い（圖 8），華北產の領域 A（前漢鏡タイプ），華中・華南產の領域 B（後漢鏡タイプ），朝鮮半島系遺物ライン（ラ

インD)，齊・燕の戰國銅貨の示すL領域（遼寧・山東產），四川省廣漢三星堆遺址出土青銅器の領域Sなどに分類されている〔平尾ほか2001〕。

三角縁神獸鏡をはじめとする各種の神獸鏡は，ほぼすべてが後漢鏡タイプの領域Bに屬している。しかし，京都府椿井大塚山古墳出土「九子作」對置式神獸鏡は，その領域Bから大きく外れたところに位置し，馬淵久夫〔2017〕はミシシッピバレー型（Mississippi Valley-Type, 略稱MVT）鑛床鉛が原料であったと指摘した。すなわち，MVT鑛床は北米のミシシッピ溪谷ではじめて確認された高放射性起源の異常鉛で，アメリカ地質調査所の資料集によれば，中國におけるMVT鑛床は遼寧省東部の柴河（關門山）鑛山，湖南省南部・廣東省北部の南嶺鑛床帶，四川省南部・雲南省北部の川滇鑛床帶という3地域に確認されている。鑛床內部や試料ごとのばらつきが大きく，通常の青銅器にみられる鉛同位體比のようなグルーピングができないが，湖南省常德市の戰國楚墓から出土した鉛バリウムガラス璧4點と彌生時代の福岡縣立岩甕棺墓出土塞杆狀ガラス1點の鉛同位體比が，領域BとMVT異常鉛の領域Sとの間に散在するため，椿井大塚山鏡も湖南省南部に廣がる南嶺鑛床帶のMVT異常鉛を用いたと馬淵は推測している。椿井大塚山鏡など對置式神獸鏡B類の制作地に推定される鄂州は南嶺鑛床帶に比較的近く，その可能性は否定できないものの，武昌に都のあった黃武年間の神獸鏡6面の鉛同位體比はすべて領域Bに屬し，紀元前にさかのぼる鉛バリウムガラスのほかはMVT異常鉛が利用された證據はほとんどないことから，檢討の餘地がある。

上にみたように，兵庫縣立考古博物館に所藏する千石コレクションには「九子」工房の創業期に試作された「九子母」同向式神獸鏡（圖錄No. 156）と椿井大塚山鏡と同類の「九子作」對置式神獸鏡（同155）がある。筆者は同館の許諾を得て2020年より千石コレクション漢六朝青銅器の化學分析を日鐵テクノロジー（株）尼崎事業所文化財調査・研究室に依頼して進めており，2021年5月に「九子」鏡の2面，さらに同年10月には參考資料として廣漢派の龍紋鈕八鳳鏡（圖錄No. 169），2022年6月には廣漢派の「吾作」畫紋帶環狀乳三神三獸鏡（同153）と獸首鏡（同162），「青盖」盤龍鏡[4)]（同161）の鉛同位體比分析と誘導結合プラズマ發光分光分析（Inductively Coupled Plasma，略稱ICP）および誘導結合プラズマ質量分析（Inductively Coupled Plasma Mass Spectrometry，略稱ICP-MS)法による

4） 上野祥史〔2005〕は龍を右側に配置する本例のような盤龍鏡を西方青盖系と呼び，分布の比較的集中する益州北部を制作地と推測している。「青盖」はもともと「尙方」工房から自立した淮派の鏡工グループで，漢鏡6期はじめ（1世紀末）までに「青羊」「黃羊」「三羊」などに分解した〔岡村2012〕。このころ「青盖」は據點を四川盆地に移したのかもしれない。なお，順帝（在位125-144年）のころ沛國豐縣（いま江蘇省徐州市豐縣）の張陵は成都近郊の鵠鳴山（鶴鳴山）に移住して初期道教の五斗米道を開いたという。徐州から益州への人の動きに注意が必要であろう。

組成分析を實施した。

表3・圖8には椿井大塚山鏡を含む3面の「九子」畫紋帶神獸鏡と廣漢派の作例として五島美術館に所藏する延熹九年（166）獸首鏡と熹平二年（173）「吾造作尙方明竟」環狀乳三神三獸鏡，今回分析した千石コレクション153「吾作」畫紋帶環狀乳三神三獸鏡・169龍紋鈕八鳳鏡・162獸首鏡，および161「青盖」盤龍鏡の鉛同位體比を示した。

表3　九子派と廣漢派の鏡の鉛同位體比

	出土地/所藏	型　式	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	文　獻
廣漢派	五島美術館	延熹九年（166）獸首鏡	18.351	15.675	0.8542	2.1133	西田 1986
	五島美術館	熹平二年（173）三神三獸鏡	18.320	15.678	0.8558	2.1181	西田 1986
	千石コレクション 153	畫紋帶環狀乳三神三獸鏡	18.390	15.685	0.8529	2.1108	本論
	千石コレクション 162	獸首鏡	18.318	15.657	0.8548	2.1176	本論
	千石コレクション 169	龍紋鈕八鳳鏡	18.285	15.663	0.8566	2.1175	本論
九子派	京都府椿井大塚山古墳	「九子作」對置式神獸鏡	19.176	15.765	0.8221	2.0658	西田 1986
	千石コレクション 155	「九子作」鍍金對置式神獸鏡	19.056	15.768	0.8275	2.0714	本論
	千石コレクション 156	「九子母」鍍金同向式神獸鏡	18.774	15.731	0.8379	2.0842	本論
青盖	千石コレクション 161	「青盖」盤龍鏡	19.002	15.743	0.8285	2.0973	本論

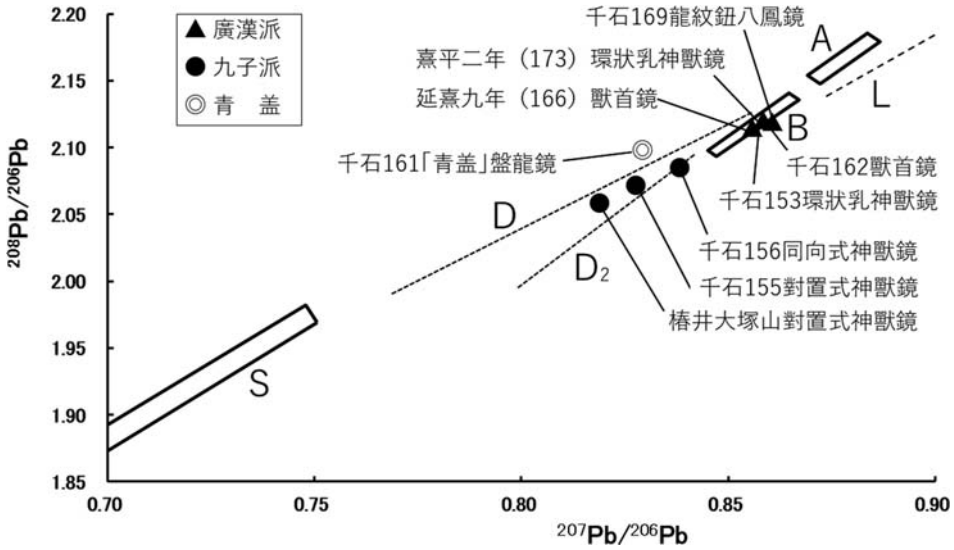

圖8　九子派と廣漢派の鏡の鉛同位體比（A式圖）

まず，「九子」鏡の鉛同位體比は，3面とも$^{207}Pb/^{206}Pb$＝0.8221～0.8379であり，後漢鏡タイプの領域Bから大きく外れている。千石156「九子母」同向式神獸鏡は朝鮮半島系遺物ラインD_2上にあるが，「九子」鏡の3面とも同じ産地の原料を用いたのであれば，朝鮮半島産の原料よりも，椿井大塚山鏡の鉛同位體比について馬淵久夫〔2017〕が指摘したMVT鑛床鉛を用いた可能性が高い。「九子」はもともと四川盆地で活動していた鏡工であり，四川省南部にもMVT鑛床が確認されているからである。また，「青盖」盤龍鏡も領域Bから外れ，「九子」鏡に近い位置にある。これに對して，廣漢派の紀年鏡2面と環狀乳三神三獸鏡・龍紋鈕八鳳鏡・獸首鏡は$^{207}Pb/^{206}Pb$＝0.8542～0.8566に集中し，同じ四川盆地で活動していたにもかかわらず，「九子」鏡や「青盖」鏡とは鉛同位體比の領域が異なっている。その原因はどこにあるのか，先秦時代にさかのぼって四川における青銅器の鉛同位體比を檢討してみよう。

6　四川盆地における古代青銅器の鉛同位體比

廣漢三星堆遺址は，紀元前2千年紀にさかのぼる初期青銅器文化の都城址である。1986年に發見された2基の遺物坑から多數の特異な青銅器が出土し，そのうち53點の鉛同位體比が分析されている〔金ほか1995〕。その結果，ほとんどの試料は$^{207}Pb/^{206}Pb$＝0.695～0.756の範圍（領域S）に分布し，高放射性起源の異常鉛であることが確認された。

2001年に發見された成都市金沙遺址では，三星堆文化に後出する前2千年紀末の青銅器が多數出土し，そのうち54點の鉛同位體比が分析されている〔金ほか2004〕。報告者は$^{207}Pb/^{206}Pb$と$^{206}Pb/^{204}Pb$の數値をもとにMVT異常鉛，異常鉛，普通鉛の3種に大別し，MVT異常鉛は三星堆の主要區域とほぼ重なり，普通鉛は領域Bから領域Aにまたがっていることを示した（表4）。また，三星堆と金沙におけるMVT異常鉛の鉛同位體比は廣い分布範圍となるため，その原料は大鑛區內の多數の鑛山に由來すると考えられた。

金沙遺址の星河路地點では春秋後期から戰國前期の舟形木棺墓群が發見され，明器を含む多數の銅武器が出土した。鉛同位體比が分析された43點のうち，2727號墓の銅戈1

表4　金沙遺址出土銅器の鉛同位體比の分類〔金ほか2004〕

	MVT異常鉛	異常鉛	普通鉛
$^{207}Pb/^{206}Pb$	0.6907～0.7665	0.8032～0.8199	0.8350～0.9090
$^{206}Pb/^{204}Pb$	23.699～20.933	19.678～19.117	18.880～16.881
戈斧形器	6件		3件
璧瑗類器	10件	1件	1件
飾金具	11件	3件	9件
容　器		1件	3件
雜　器	1件	1件	4件

點が領域 A に屬し，2712 號墓の劍鞘 1 點が A 式圖で領域 B の左下に少し外れているのを除けば，41 點すべてが領域 B に屬している〔黎ほか 2018〕。

また，長江を下った重慶地區では，東周時代の雲陽李家壩遺址・涪陵小田溪墓群・萬州大坪墓群・開縣餘家壩遺址から出土した各種青銅器の鉛同位體比が分析されている〔楊ほか 2013〕。その計 55 點は^{206}Pb/^{204}Pb＝17.4630～18.6960，^{207}Pb/^{204}Pb＝15.5573～15.8490，^{208}Pb/^{204}Pb＝36.7828～39.3869 という値を示し，すべてが領域 B と領域 A の普通鉛である。その內譯をみると，春秋時代にさかのぼる李家壩の銅武器 2 點は領域 B，戰國時代に下る小田溪・大坪・餘家壩では計 40 點のうち 20 點が領域 A に屬している。春秋戰國時代の重慶地區は巴の勢力圈で，長江中流域の楚と密接な關係をもっていたが，前 316 年に秦は蜀を，つづいて巴を滅ぼし，楚に進攻する足がかりとした。MVT 異常鉛の產地は長江をさかのぼった四川省南部から雲南省北部の金沙江流域が有力な候補となるが，報告者はこれらの普通鉛も同じ「滇川黔鉛鋅（Pb-Zn）多金屬成礦區」に產地を推定している。そこには MVT 異常鉛から普通鉛までさまざまな同位體比をもつ鉛が存在するのである。

ほかにも香港中文大學に所藏する巴蜀文化の青銅器 7 點と雲南滇文化の青銅器 8 點の鉛同位體比が分析されている〔Yeung *et al.* 2002〕。巴蜀文化は春秋戰國時代に，滇文化は戰國～前漢時代にそれぞれ竝行し，領域 B に巴蜀文化の 6 點と滇文化の 3 點，領域 A-B 間に巴蜀文化と滇文化の各 1 點，領域 B 外の異常鉛に滇文化の 4 點が屬している。

以上のように，先秦時代の四川・雲南地方における青銅器の鉛同位體比は，表 4 の分類を參考に，MVT 異常鉛の領域 S，異常鉛の領域 S-B 間，普通鉛の領域 B・領域 A-B 間・領域 A に區分でき，おおむね MVT 異常鉛から普通鉛へと段階的に移行している。すなわち，初期青銅器時代の三星堆文化ではもっぱら MVT 異常鉛が用いられたが，西周時代に竝行する金沙遺址では領域 A から領域 B にまたがる普通鉛と領域 S-B 間の異常鉛が出現し，MVT 異常鉛と併用された。鉛原料がもっとも廣範に利用された段階である。しかし，金沙星河路の東周墓葬では領域 B，重慶地區の東周墓葬では領域 A から領域 B にまたがる普通鉛が主に用いられ，領域 S-B 間の異常鉛は四川ではほとんど消失したが，雲南の滇文化ではそれが依然として普通鉛と併用されている。

中原でも殷墟青銅器のほとんどは MVT 異常鉛であるが，殷末周初を境にそれは消失に向かい，普通鉛に轉換している[5)]。その推移は四川・雲南地方と軌を一にするが，普通

5） 湖北省隨州市廟臺子遺址は西周時代の鑄銅遺址であり，出土した西周早期の削刀・銅片・銅塊など 6 點の鉛同位體比は領域 B に屬しているが，商代中期とされる銅塊・銅スラッグの 3 點のそれは MVT 異常鉛と報告されている〔湖北省文物考古研究所ほか 2022〕。同じ遺址でも商代中期と西周早期とで原料の產地がちがっているのだろう。

鉛への變化は中原→蜀→巴→滇の順に地理的勾配をもって後れていったのである。

前節にみたように，廣漢派の紀年鏡２面は後漢鏡タイプの領域Ｂに屬している。また，廣漢派にはじまる八鳳鏡の６面も，三國吳に下る兵庫縣奥山大塚古墳出土鏡を含めてすべて領域Ｂに入っている〔馬淵 2014〕。鉛同位體比によって長江上流域と中下流域の原料產地を區別するのはむずかしいが，先秦時代より四川盆地では領域Ｂの鉛が廣く用いられていたことから，２世紀の廣漢派は傳統的に用いられていた地元の原料を利用した可能性が高い。

一方，「九子」畫紋帶神獸鏡で確かめられた領域S–B 間の異常鉛は，漢代の四川盆地でまったく用いられていなかったというわけではなく，今回分析した千石コレクション 161「青盖」盤龍鏡のほか，東京國立博物館に所藏する銅製搖錢樹が同じ領域に屬している〔高濱ほか 2001〕。それは１本の太い幹に十數枚の枝葉を別に鑄造して組み合わせたもので，出土地は不明ながら，四川盆地とその周邊地域の後漢後期墓からしばしば發見され，年代と出土地が「九子」鏡と重なっている。その７か所の鉛同位體比を分析したところ，$^{207}Pb/^{206}Pb$＝0.7482～0.8353，$^{206}Pb/^{204}Pb$＝18.814～21.278 であり，７試料すべて領域S–B 間に分散していることから，報告者は２種類の原料を混合したと推測している。おそらく領域Ｂ＋領域Ｓ原料の２種混合と考えたのだろうが，領域S–B 間の方鉛鑛が存在し〔新井 2000〕，先秦時代の巴蜀青銅器に例があることから，原料の產地は１か所だけであったのかもしれない。いずれにせよ搖錢樹のような四川特有の副葬用明器に異常鉛が用いられていたことからみれば，「九子」畫紋帶神獸鏡や「青盖」盤龍鏡は在地性の強い生產體制のもとで制作されたと考えられよう。

7　九子派の工房は東方に移轉したか

廣漢派と九子派は後漢後半期に四川盆地にて作鏡活動をおこなっていた。九子派の創業期を除けば，圖像紋樣や銘文にあらわれた兩者の交流は限定的であり，廣漢派は中央官廳の尙方からの發注を受けて作品のほとんどは域外に輸出されたのに對して，三段式神仙鏡と九子派創業期の神獸鏡は地元を中心に流通した。九子派はそうした在地的な鏡工であったが，對置式神獸鏡Ｂ類になると，一轉して鄂州から集中的に出土し，やがて九子派の創作した對置式神獸鏡は江南の吳派や會稽派に受容されて代表的な吳鏡として廣域に展開していった。このことから九子派の鏡工が四川盆地から長江中流域に移轉したと推測されたのである。

冒頭に述べたように，後漢代の四川・雲南では，犍爲屬國の縣名を記した「朱提造」や「堂狼造」のほか，民間の作器者を記した「蜀郡董氏」や「蜀郡嚴氏」などの銅容器

がさかんに制作されていた。器形・紋様・銘文をもとに吳小平ら〔2021〕は，これらを朱提堂狼器と蜀郡器の2グループに大別し，朱提堂狼器には76～175年の紀年銘があること，朱提堂狼器の多く出土する雲南・貴州省から蜀郡器は出土しないが，關中・河南・安徽・浙江では蜀郡器のみが出土していることを明らかにした[6]。廣漢派の作品と同じように，蜀郡器は地元の四川盆地よりも域外から多く出土しているのである。

また，鄂州からは廣漢派の永康元年（167）「吾造作」・熹平二年（173）「吾作」獸首鏡や熹平七年（178）「暴氏作」環狀乳神獸鏡が出土し，長江北岸の蘄春縣對面山1號墓からは熹平年（172-178）「吾作」方銘四獸鏡が出土するなど，160～170年代の紀年鏡が少なからず鄂州に運ばれている。長江に面した鄂州は，そのころすでに物流の據點であり，2世紀後葉に下る九子派の對置式神獸鏡B類は，先行して流通していた蜀郡器や鏡の交易ルートに便乘して長江中流域に廣がった可能性があろう。

もっとも2世紀後葉には鏡工の移動も活發になる〔岡村2017：165-194頁〕。廣漢派の創作した八鳳鏡は，2世紀後半の凹帶A式になると黃河流域に廣く分布し，「雒陽」の鏡工「趙禹」は南遷して獨特の八鳳鏡を創作した。後續する凹帶B式は鄂州を中心に長江中下流域に廣がり〔岡村2012〕，廣漢派の獸首鏡も簡略化した型式が長安・南陽・武昌（鄂州）の周邊に集中し，それぞれの地域で生產されていたと考えられている[7]〔馬渕2017〕。つまり，2世紀後葉には鄂州のあたりで八鳳鏡や獸首鏡の生產がはじまっているのである。

前節に論じたように，「九子」畫紋帶神獸鏡の鉛同位體比は3面とも領域S-B間に位置している。そのうち「九子母」同向式神獸鏡は「九子」工房の創業期の作品であり，地元で制作された搖錢樹と同じように身近な原料を用いたと考えられる。しかし，長江中流域から多く出土する「九子作」對置式神獸鏡B類も同じ領域S-B間に位置していることについては，次の3通りの解釋ができるだろう。

〈解釋1〉工房はそのまま四川盆地に留まり，制作された鏡はもっぱら長江中下流域に向けて販賣された。

〈解釋2〉工房は鄂州に移轉したが，原料は四川に工房が所在したときから取引のある

6） 吳小平らは朱提堂狼器と蜀郡器を同時に竝行する2系列の銅器群と考えるのに對して，川村佳男〔2021〕はそのうち銅盂を3期に編年し，第3期後半（後漢末期）に朱提堂狼から蜀郡へと制作地が移轉したと推測している。

7） 廣漢派の獸首鏡には延熹三年（160）「廣漢西蜀造作」鏡のように側視形の獸頭を主紋とするタイプがまれにあり，その主紋を雲氣に簡略化した小型鏡が長安で模作され，洛陽ではさらにそれを風車形に簡略化している〔岡村2022〕。八鳳鏡も同じように廣漢派のそれを模作することにより凹帶A式が派生したのであろう。

業者から引きつづき取り寄せた。

〈解釋 3〉工房は鄂州に移轉し，原料は新たに湖南省南部の MVT 嶺南鑛床帶に產する異常鉛を利用した。

鏡の出土地を重視すれば，工房の東方移轉を考える〈解釋 2〉と〈解釋 3〉が支持される。そのうち〈解釋 3〉は椿井大塚山「九子作」鏡について論じた馬淵久夫〔2017〕說に同じであるが，領域 S-B 間の原料を用いた後漢鏡が長江中下流域に知られていないのが問題である。これに對して上述の鄂州市鄂鋼制氧站出土「黃武年十月」同向式神獸鏡は，蜀郡出身の鏡工が會稽山陰にて制作したことが銘文から讀み取れ，鄂州では 2 世紀末に廣漢派の八鳳鏡や獸首鏡をモデルとした鏡生產がはじまっているから，こうした作鏡動向をふまえると〈解釋 2〉が支持されよう[8]。しかし，長江の水運を利用した上流域と中下流域との交流はかねてより緊密で，四川・雲南で制作された蜀郡器や朱提堂狼器，廣漢派の鏡が廣く東方に流通していることからみれば[9]，四川で制作された鏡が長江を下って中流域に多くもたらされたとする〈解釋 1〉も十分に成り立つ可能性がある。とくに鄂州では開發にともなう發掘調査が廣く進められた結果，他地域を壓倒する數の漢末・三國鏡が出土し，みかけ上の分布の中心になっているだけなのかもしれない。鉛同位體比の分析數が少ない現狀では 3 通りの解釋の優劣はつけがたく，考古學的分析を含め，今後の課題としたい。

8 餘　　論
── 京都府椿井大塚山古墳出土「九子作」鏡の歷史的意義 ──

「九子作」對置式神獸鏡（圖 9 左）の出土した京都府木津川市椿井大塚山古墳は，全長 175 m の前方後圓墳で，景初三年（239）に魏帝が倭女王卑彌呼に下賜した「銅鏡百枚」に比定される三角緣神獸鏡など 36 面以上の鏡がまとまって出土したことにより，邪馬臺

8） 前漢末期の方格規矩四神鏡Ⅲ式には「漢有善銅出丹陽」銘が多く用いられているが，紹興越國文化博物館の所藏鏡には「漢有善銅出堂浪」という銘文がある（2011 年實查）。「漢有善銅」銘の方格規矩四神鏡Ⅲ式は淮南あたりの制作と考えられるから〔岡村 2019〕，「堂狼」產の「善銅」が長江を利用して淮南にまで運ばれた可能性が高い。

9） 出土地のわかる廣漢派の紀年鏡に，重慶市の元興元年（105）八鳳鏡，河南省南陽地區の元興元年（105）・延熹二年（159）環狀乳神獸鏡，延熹六年（163）・十年（167）・永康元年（167）獸首鏡，湖南省湘陰縣の永壽三年（157）獸首鏡，湖北省鄂州市の永康元年（167）・熹平二年（173）獸首鏡・熹平七年（178）環狀乳神獸鏡，湖北省蘄春縣の熹平年（172–178）方銘獸紋鏡がある。また，龍紋鈕をもつ廣漢派の八鳳鏡が內蒙古自治區包頭市召灣 91 號「建寧三年（170）」墓〔魏 1998〕や同察右後旗三道灣 118 號墓のほか，河北省邯鄲市嶽城水庫，山西省廣靈縣北關 49 號墓，安徽省霍邱縣張家崗墓，河南省南陽市防爆廠 208 號墓，湖南省湘陰縣安素平鄉など，同じく獸首鏡が安徽省壽縣馬家古堆 3 號墓，河南省淅川縣溝灣 W71，湖北省鄂州市濱湖路 1 號墓などから出土している。

國ひいては倭王權の成立を考える重要な考古資料として注目されてきた〔小林 1961 など〕。九子派の鏡をめぐる上述の分析をふまえ，ここでは椿井大塚山古墳から「九子作」鏡が出土した歴史的意義を檢討しておきたい。

椿井大塚山「九子作」鏡の年代については，建安二十一年（216）「會稽所作」鏡や建安二十四年（219）鏡に類似した紋様をもつことから，3 世紀前半の制作と考えられてきた。しかし，第 4 節にみたように，椿井大塚山「九子作」鏡は對置式神獸鏡 B 類の典型であり，およそ 180 年代の制作である。これに對して建安末期の紀年銘をもつ對置式神獸鏡は B 類を模作した會稽派の C 類である。たとえば，圖 9 右は五島美術館藏の建安二十四年鏡（五島 38）で，徑 13.0 cm，左の椿井大塚山「九子作」鏡と比べると，外區の畫紋帶＋唐草紋帶を銘帶＋渦紋帶に變えているほかは，ほとんど同じ紋様構成になっている。また，內區主紋の陰陽二神が山形の巨（維剛）の上の龍虎座に坐り，兩肩から蕨手狀の雲氣が發出する表現は，九子派のそれと同じで，半圓方形帶の紋様もよく似ている。しかし，內區主紋は西王母と東王公の區別がつかないほど形骸化し（圖 9 の 7・8），獸の肩と腰の環狀乳が消失している。もっとも九子派は銘文に獨創性を發揮しなかったのに對して，建安二十四年鏡は會稽派に獨特の長い銘文をもっている。すなわち，外區の銘文は，

建安廿四年五月丁巳朔卅日丙午造作明竟，旣清且良巧，牛羊有千，家財三億，宜侯王，位至三公，長生□□□。

とあり，內區外周の方格銘は「□□先□師明且吉」とある。210～220 年代に活躍した會稽派は，このように圖像紋様は漢末の神獸鏡を模倣しつつ，神祕的な干支の術數論にもとづく年月日を銘文に記し，獨自の銘文を刻んでいるから，漢鏡と吳鏡との辨別はむずかしくない[10]〔岡村 2013〕。

このように椿井大塚山「九子作」鏡の制作が 180 年代にさかのぼるとすれば，それは日本考古學にどのような影響をおよぼすのだろうか。また，その制作地が長江の上流域か中流域かは今後の課題としても，こうした內陸部で制作された漢鏡 7 期（2 世紀後半）の鏡はほかにも存在するのか，黨錮の禁や黃巾の亂などによって後漢王朝が混亂する中，どのようなルートで日本列島にもたらされたのだろうか。

樂浪郡の所在した朝鮮半島西北部と日本列島から出土した漢鏡 7 期の鏡は計 250 面ほ

10） 神戸市夢野丸山古墳から出土した重列式神獸鏡も黃龍元年（229）「師陳世嚴造作」鏡など會稽派の紀年鏡に類似する紋様があるため，3 世紀に下る吳鏡と考えられている〔今尾 2013〕。しかし，銘文からみて會稽派のモデルとなった「張氏元公」や「盖（方）」らの重列式神獸鏡に近似し，180～190 年代に編年するのが妥當である〔岡村 2013〕。

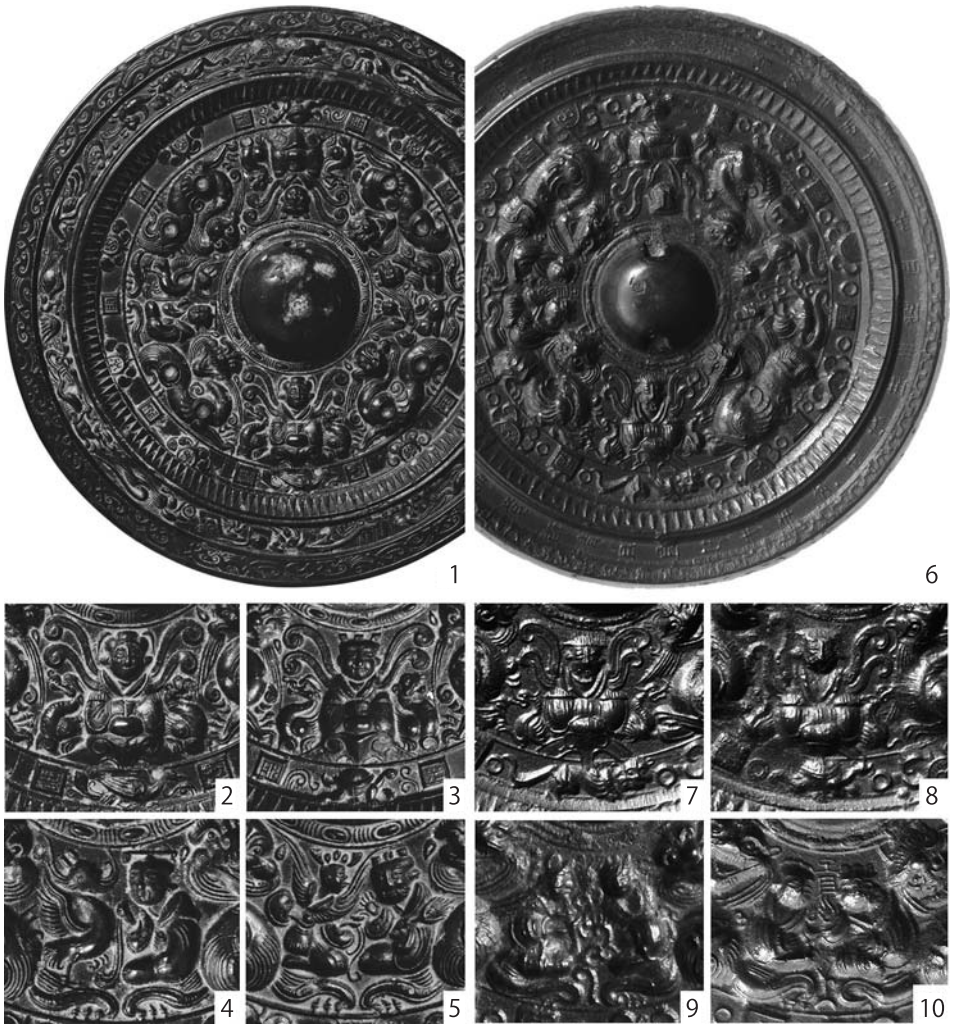

圖 9　椿井大塚山「九子作」鏡（左）と建安二十四年（219）鏡（右）

どを數え，そのほとんどは地理的に近い徐州系の鏡である。しかし，四川盆地や關中に起源をもつ華西系[11]の鏡もいくらか含まれ，その確かな例として傳ピョンヤン出土延熹七年（164）獸首鏡がある（紀年鏡圖說：漢 13）。これは龍紋鈕をもつ廣漢派の作品で，銘文に「吾造作尙方明竟」とあることから，いったん發注元である洛陽の「尙方」に納品

11）森下章司〔2011〕は「地域ごとの單位」として四川・陝西の鏡群を「華西系」とする一方，四川盆地の「廣漢西蜀造作」鏡などを「廣漢郡系」と呼んで區別する。しかし，その「系」には地域と流派の兩方を含んでいる。本稿では華西系という地域單位の中に廣漢派や九子派などの流派が存在したと考え，「系」と「派」を區別して用いる。

された後，樂浪郡にもたらされたものと考えられる。このほかの候補として傳ピョンヤン出土の龍紋鈕八鳳鏡に東京國立博物館藏鏡（聚英 35–5）と橋都榮樹舊藏鏡（樂浪郡 1284）の 2 面があり，日本列島から出土した廣漢派の鏡には以下の 11 面がある。

① 廣島縣廣島市宇那木山 2 號墳：畫紋帶環狀乳三神三獸鏡（徑 10.7 cm）
② 廣島縣庄原市大迫山 1 號墳：獸首鏡（徑 14.2 cm）
③ 鳥取縣南部町淺井 11 號墳：畫紋帶環狀乳四神四獸鏡（徑 15.7 cm）
④ 岡山縣備前市新庄所在古墳：畫紋帶環狀乳三神三獸鏡（徑 11.2 cm）
⑤ 兵庫縣たつの市綾部山 39 號墓：畫紋帶環狀乳三神三獸鏡（徑 11.0 cm）
⑥ 兵庫縣豐岡市入佐山 3 號墳：方銘獸紋鏡（徑 12.3 cm）
⑦ 兵庫縣姫路市宮山古墳：畫紋帶環狀乳三神三獸鏡（徑 11.8 cm）
⑧ 京都府京丹後市大田南 2 號墳：畫紋帶環狀乳三神三獸鏡（徑 14.8 cm）
⑨ 京都府龜岡市三ツ塚 2 號墳：畫紋帶環狀乳三神三獸鏡（徑 11.8 cm）
⑩ 大阪府藤井寺市珠金塚古墳：畫紋帶環狀乳三神三獸鏡（徑 14.1 cm）
⑪ 山梨縣甲府市大丸山古墳：畫紋帶環狀乳三神三獸鏡（徑 11.8 cm）

②の獸首鏡と⑧の畫紋帶環狀乳三神三獸鏡は龍紋鈕をもち[12]，③の畫紋帶環狀乳四神四獸鏡は方格に 1 字ずつ「早作尙方明竟，買者長宜官位」とある[13]。「早」は「造」の假借。この銘文からみて③は傳ピョンヤン出土延熹七年（164）獸首鏡と同じように洛陽の「尙方」から樂浪郡をへて現地に流入したのであろう。④の畫紋帶環狀乳三神三獸鏡は方格に「吾作明竟，幽湅三剛。大吉」という銘文があり〔小松原 2000〕，「三商」を「三剛」とするのも廣漢派にはじまる特徵である。これに對して①・⑤・⑦・⑨・⑩・⑪は廣漢派の作とみなす直接的な證據はないものの[14]，環狀乳神獸鏡は 160～170 年代に三神三獸鏡から四神四獸鏡へと變化し，180 年代には「張氏元公」ら江南の鏡工によって環狀乳四神四獸鏡が模作されていることからみれば，2 世紀第 3 四半期の制作と考えられる。また，方銘獸紋鏡には熹平年（172–177）・中平六年（189）・初平元年（190）という 3 種の紀年鏡

12） 廣島縣大迫山 1 號墳の獸首鏡はいちじるしく摩滅しているため，龍紋鈕に氣づかれていないが〔東城町敎育委員會ほか編 1989〕，1989 年に實見して確認した。調査にあたっては古瀨清秀さんのお世話になった。

13） かつて「作尙方明竟，買者長宜官，位至」と讀まれていたが，「至」は「早」の誤釋で六言 2 句に讀むのが妥當である〔久保 2010〕。「造作」を「早作」とした紀年鏡の例に廣漢派の永康元年（167）環狀乳三神三獸鏡・同四神四獸鏡・熹平元年（172）獸首鏡・光和四年（181）環狀乳三神三獸鏡・中平四年（187）環狀乳四神四獸鏡がある。

14） 關中出土の簡略化した畫紋帶環狀乳神獸鏡について，森下章司〔2011〕は關中で制作された華西系としている。日本出土畫紋帶環狀乳三神三獸鏡のうち①宇那木山鏡の紋樣と銘文は簡略化し，關中で制作された可能性がある。

があり，⑥のようなやや簡略な型式のものは關中でも制作された〔森下 2011〕。ほかにも福岡縣上坂遺跡・鳥取縣國分寺古墳・兵庫縣ヘボソ塚古墳・岐阜縣象鼻山 1 號墳・石川縣國分尼塚古墳から出土した八鳳鏡や奈良縣小泉大塚古墳から出土した獸首鏡なども廣漢派の作の可能性がある[15]。

また，①廣島縣宇那木山 2 號墳・⑤兵庫縣綾部山 39 號墓・⑪山梨縣大丸山古墳から出土した畫紋帶環狀乳三神三獸鏡について鉛同位體比が測定されている（表 5）。この 3 例とも鉛同位體比は領域 B に屬しているが，A 式圖で比較すると（圖 10），①宇那木山鏡と⑪大丸山鏡は廣漢派の典型例に近い値を示すのに對して，⑤綾部山鏡は領域 B の左端に偏っている[16]。⑤綾部山鏡はひどい銹化のために紋様や銘文が不鮮明だが，なんらかの理由で領域 B と九子派の鏡に用いられた領域 S-B 間の原料が混合された可能性もあろう。今後の檢討が必要である。

廣漢派の鏡は地元の四川盆地から出土することがなく，主に「尙方」から發注を受けて鏡を生產し，その製品は洛陽から廣域に流通した。飛び抜けて古い元興元年鏡の 2 面を除けば，9 例が 157 年から 170 年代までの間に集中している[17]。とくに後漢後半期には宦官が尙方を私官化したため〔楢山 2002〕，宦官勢力のいちじるしく伸長した桓靈期（146-189）に廣漢派の「尙方明鏡」の生產量がますます擴大していったのであろう。しかし，それも 170 年代までである。樂浪郡や日本列島にまでおよんでいる廣漢派の鏡は，黃巾の亂によって後漢王朝が混亂に陷る 184 年より前に流通していたのであろう。

一方，廣漢派以外の華西系鏡は，地元の四川盆地や關中のほか，長江中流域に數面の出土例があるものの，洛陽から朝鮮半島におよぶ地域からは管見のかぎり 1 面も出土していない。ところが，日本列島からは⑫椿井大塚山「九子作」鏡のほか，⑬群馬縣前橋天神山古墳から三段式神仙鏡 c 類が出土している。森下章司〔2012〕は三段式神仙鏡 b・c 類や方銘四獸鏡をおおまかに 2 世紀後半から 3 世紀はじめごろ陝西で制作されたと考え

15） 岡山縣津山市正仙塚古墳（竹塚古墳）から出土した神獸鏡は，復元徑 11.7 cm，所在不明のため三神三獸鏡か四神四獸鏡かは確認できないが，梅原末治〔1952〕によれば，「舶載後永く傳世したと見えて兩面共に著して摩滅してゐるのみならず，現存部の兩端にそれぞれ表裏から穿った圓孔があって，破片となって後も珍重せられた」外區の 1/4 を殘す破鏡であり，外區に銘文をもつことから，廣漢派の神獸鏡であった可能性が高い。梅原報告については下垣仁志氏の敎示をえた。

16） 比較的近い鉛同位體比の例に，漢鏡 6 期から 7 期の滋賀縣和邇大塚山古墳出土「靑盖作」盤龍鏡，福岡縣岩屋③ B 出土雙頭龍紋鏡，同縣馬場山 41 號土坑墓出土八鳳鏡，群馬縣三本木古墳出土「袁氏作」畫像鏡があり〔馬淵 2014〕，制作系統は一定しない。

17） 注 9）に例示したほか，河南省新鄕市金燈寺 47 號墓出土の八鳳鏡には「董氏造作尙方明竟」という銘文があり〔鄭州大學歷史學院考古系ほか 2009〕，洛陽の「尙方」を經由したことがわかる。

表 5　日本出土畫紋帶三神三獸鏡の鉛同位體比

出土地	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	文　獻
①廣島縣宇那木山 2 號墳	18.365	15.660	0.8527	2.1113	馬淵 2014
⑤兵庫縣綾部山 39 號墓	18.576	15.694	0.8449	2.0988	齋藤 2005
⑪山梨縣大丸山古墳	18.420	15.694	0.8520	2.1101	馬淵 2014

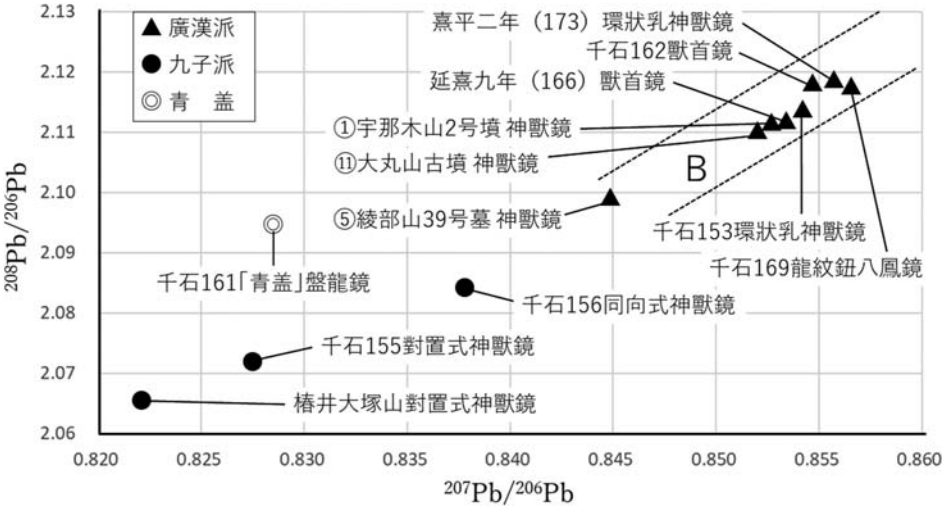

圖 10　日本出土畫紋帶三神三獸鏡とそれに關連する鏡の鉛同位體比

ているから，⑬前橋天神山鏡や⑥入佐山鏡は廣漢派の鏡とは別ルートで日本列島にもたらされたとみられる。問題はその制作と流入の時期である。

董卓は 190 年に洛陽の都を燒き拂って獻帝を長安に拉致し，董卓が殺された後も李傕・郭汜らの暴政によって關中はいちじるしく荒廢した。『後漢書』董卓傳には「初め帝（獻帝），關に入るに，三輔の戶口はなお數十萬あり。（李）傕・（郭）汜の相い攻むるより天子の東歸（岡村注：196 年，獻帝は洛陽に歸還）後まで，長安の城は空しきこと四十餘日，强き者は四散し，よわき者は相い食み，二，三年の閒に關中にはもはや人跡なし」という。東方に避難する人びとも少なくなく，中でも長安の獻帝を支援していた徐州牧の陶謙は多くの流民を受け入れていたが，193 年に曹操がその徐州を攻略して男女數十萬人を殺戮した。このため「初め三輔は李傕の亂に遭い，百姓の流移して（陶）謙に依る者は皆な殲くさる」（同陶謙傳）とあり，關中から徐州に逃れてきた難民までことごとく殺されている。その後，關中は 197 年に曹操が鍾繇を派遣して一時的に平穩を取り戻すが，曹操が馬超ら關中に據る軍閥連合軍を平定したのは 211 年のことであった（『魏志』武帝紀）。このような動亂の中で，關中における作鏡活動が 3 世紀まで安定的に繼續したのか，はなはだ疑問である。

上述のように三段式神仙鏡が a 類から b 類へと變化したのは「九子」工房の創業期で，

160〜170 年代のことであるから，⑬前橋天神山鏡や⑥入佐山鏡の年代はさらに半世紀ほどつづくというより，下っても 190 年代はじめの「李催の亂」までとしておくのが妥當であろう。そうであるならば，その 2 面は 180 年代に制作された⑫椿井大塚山「九子作」鏡とほぼ同じころに日本列島に流入した可能性が高い。

筆者はかつて漢鏡 7 期をおおまかに 3 段階に區分し，第 1 段階は上方作系浮彫式獸帶鏡・飛禽鏡・畫像鏡・八鳳鏡・獸首鏡など，第 2 段階は畫紋帶神獸鏡，第 3 段階は斜緣神獸鏡とした〔岡村 1999：125-144 頁〕。それは日本列島から出土する徐州系の鏡にもとづく段階區分であり，型式論にもとづいて各鏡種の細かい編年を組み立てる必要があるが，實年代からみると，上にみた廣漢派の鏡はその第 1 段階に，椿井大塚山「九子作」鏡と前橋天神山鏡はその第 2 段階に位置づけることができるだろう。ただし，⑦兵庫縣宮山古墳・⑨京都府三ツ塚 2 號墳・⑩大阪府珠金塚古墳は中期古墳とされ，5 世紀の對外交流によって新たに流入した鏡の可能性があるため，當面の議論からは除外しておくのが無難であろう〔岡村 2005〕。

次に鏡の出土墳墓をみると，廣漢派の 8 面のうち 7 面は①安藝・②備後・③伯耆・④備前・⑤播磨・⑥但馬・⑧丹後という中國地方と近畿北部に偏在し，いずれも三角緣神獸鏡をともなうことがなく，①宇那木山 2 號墳・⑤綾部山 39 號墓・⑧大田南 2 號墳は古墳出現期にさかのぼる小規模墳である。これに對して東方の⑪大丸山古墳・⑫椿井大塚山古墳・⑬前橋天神山古墳は三角緣神獸鏡をともなう大型の前方後圓墳である。鏡にはある程度の使用期間や傳世期間が見込まれるため，墳墓の年代は問題にしないとしても，こうした分布のちがいと出土墓にあらわれた格差は日本列島への流入時期に基因するのであろう。すなわち，その制作年代からみて，漢鏡 7 期第 1 段階にさかのぼる廣漢派の鏡は畿內の邪馬臺國を中心とする倭王權の成立前に廣範な地域間ネットワークによって流入し，それぞれの地域首長が自律的に入手したのに對して，第 2 段階に下る鏡は，のちの三角緣神獸鏡と同じように，いったん畿內の倭女王卑彌呼のもとに集積され，そこから一元的に分配されたと考えられる〔岡村 1999：114-144 頁〕。

そうした倭王權の成立については，『魏志』倭人傳に「其の國，本と亦た男子を以て王と爲し，住まること七，八十年，倭國亂れ，相い攻伐すること歷年，乃ち共に一女子を立てて王と爲す。名づけて卑彌呼と曰う」とあり，107 年における倭國王帥升らの朝貢より 70〜80 年を經た 2 世紀末に倭國亂が勃發し，卑彌呼が倭王に共立されたことによって歷年の大亂が終息したと考えられる[18]。それはちょうど黃巾の亂によって後漢王朝が衰

18）『魏志』倭人傳（『三國志』魏書・東夷傳・倭人條）は西晉の陳壽の撰。倭國王帥升らの朝貢記事は劉宋の范曄の編纂した『後漢書』倭傳に「安帝永初元年，倭國王帥升等獻生口百↗

退する中，180～190 年代に制作された漢鏡 7 期第 2 段階の鏡が日本列島に流入する段階にあたっている。また，190 年，遼東太守の公孫度は後漢王朝の混亂に乘じて自立し，南には樂浪郡，海を越えては山東半島の一部にまで支配領域を擴大した（『魏志』公孫度傳）。204 年に公孫度が沒し，後を繼いだ子の公孫康は樂浪郡の南部を分割して帶方郡を新設すると，「是の後，倭・韓は遂に帶方に屬す」（同韓傳）とある。かねてより倭は樂浪郡を窓口に中國王朝と交流していたが，以後，帶方郡がそれを擔うことになったのである。倭王權は鏡を含めた對外交易をコントロールし，漢鏡 7 期第 2 段階の畫紋帶神獸鏡は公孫氏の支配する帶方郡を通じて倭王のもとに一元的にもたらされたのであろう。

日本列島から出土する漢鏡 7 期の鏡はほとんどが徐州系の鏡である。しかし，それらの鏡は實年代を比定する手がかりに乏しく，本稿では廣漢派の鏡と椿井大塚山「九子作」鏡などの分析によって上の私見をいくぶん補强したものの，その數は十數面にすぎず，なお檢討すべき課題が山積している。もって今後に期したい。

【謝　　辭】

本研究は JSPS 科研費「漢晉變革の考古學的研究」（21H00593）の成果の一部である。兵庫縣立考古博物館（和田晴吾館長）所藏千石コレクションの化學分析にあたっては，同館の種定淳介さん，日鐵テクノロジー（株）尼崎事業所文化財調査・研究室の渡邊綏子・隅英彦さんのお世話になった。また，2022 年 2 月 4 日に人文研の共同研究「3 世紀東アジアの研究」班（森下章司班長）にて報告した際には多くの敎示をうけた。記して御禮を申し上げたい。

參 考 文 獻

【著錄略號】
鄂州……鄂州市博物館 2002『鄂州銅鏡』，中國文學出版社
鄂城……湖北省博物館・鄂州市博物館 1986『鄂城漢三國六朝銅鏡』，文物出版社
紀年鏡圖說……梅原末治 1942『漢三國六朝紀年鏡圖說』京都帝國大學文學部考古學資料叢刊第 1 册，桑名文星堂
今照……浙江省博物館編 2012『古鏡今照 ── 中國銅鏡研究會成員藏鏡精粹』，文物出版社
古鏡……羅振玉 1916『古鏡圖錄』
五島……五島美術館學藝部編 1992『前漢から元時代の紀年鏡』展覽會圖錄 No. 113，五島美術館
聚英……後藤守一 1942『古鏡聚英』上篇，大塚巧藝社
集釋……「中國古鏡の研究」班 2009～2013「前漢鏡銘集釋」「後漢鏡銘集釋」「三國西晉鏡銘集釋」

↘ 六十人，願請見」とあり，つづけて「桓靈間，倭國大亂，更相攻伐，歷年無主。有一女子名曰卑彌呼，……於是共立爲王」という。『魏志』と『後漢書』とで倭國亂の時期がいささか異なるが，成書年代の早い『魏志』にしたがうべきだろう。

「漢三國西晉紀年鏡銘集釋」「漢三國鏡銘集釋補遺」『東方學報』京都第 84～88 冊
圖錄……兵庫縣立考古博物館編 2017『千石コレクション ── 鏡鑑編』
樂浪郡……朝鮮總督府 1927『樂浪郡時代の遺蹟』古蹟調査特別報告第 4 冊

【日文】五十音順
新井宏 2000「鉛同位體比による青銅器の鉛產地推定をめぐって」『考古學雜誌』第 85 卷第 2 號
今尾文昭 2013「忘れてはならない吳鏡 ── 神戸市夢野丸山古墳出土鏡の複製品」奈良縣立橿原考古學研究所附屬博物館編『海でつながる倭と中國』，新泉社
上野祥史 2005「鏡の生產と流通からみた四川をめぐる地域間關係」『シルクロード學』Vol. 24
梅原末治 1952「岡山縣下の古墳發見の古鏡」『古代吉備』第 85 號
岡村秀典 1999『三角緣神獸鏡の時代』，吉川弘文館
岡村秀典 2005「畫文帶神獸鏡」『綾部山 39 號墓發掘調査報告書』御津町埋藏文化財調査報告書 5
岡村秀典 2008「中國古代の青銅器生產」『國學院雜誌』第 109 卷第 11 號
岡村秀典 2011「後漢鏡銘の研究」『東方學報』京都第 86 冊
岡村秀典 2012「後漢鏡における淮派と吳派」『東方學報』京都第 87 冊
岡村秀典 2013「漢三國西晉時代の紀年鏡 ── 作鏡者からみた神獸鏡の系譜」『東方學報』京都第 88 冊
岡村秀典 2019「王莽鏡論」『東方學報』京都第 94 冊
岡村秀典 2022「中國で發見された景初三年鏡」『史林』第 105 卷第 5 號
川村佳男 2021「漢代銅盂の研究 ── とくに陽鑄の銘文と文樣をめぐって」『中國考古學』第 21 號
小林行雄 1961『古墳時代の研究』，青木書店
小松原基弘 2000「岡山縣立博物館所藏の古鏡について（一）」岡山縣立博物館『研究報告』第 20 號
齋藤努 2005「綾部山 39 號墓出土畫文帶神獸鏡の鉛同位體比測定結果」『綾部山 39 號墓發掘調査報告書』御津町埋藏文化財調査報告書 5
齋藤努 2019「鉛同位體比からみた日韓青銅資料の原料の產地」『國立歷史民俗博物館研究報告』第 213 集
高濱秀・鈴木浩子・早川泰弘・平尾良光 2001「搖錢樹の鉛同位體比」平尾良光編『古代東アジア青銅の流通』，鶴山堂
「中國古鏡の研究」班 2012「漢三國西晉紀年鏡銘集釋」『東方學報』京都第 87 冊
東城町教育委員會・廣島大學文學部考古學研究室 1989『大迫山第 1 號古墳』發掘調査概報
楢山滿照 2002「四川製作の後漢元興元年銘鏡について」『美術史研究』第 40 冊（同 2017『蜀の美術鏡と石造遺物にみる後漢期の四川文化』早稻田大學エウプラクシス叢書に再錄）
西田守夫 1986『三角緣神獸鏡の製作地の研究』昭和 59・60 年度科學研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告書
林巳奈夫 1973「漢鏡の圖柄二，三について」『東方學報』京都第 44 冊（同『漢代の神神』，臨川書店，1989 年に再錄）
原田三壽 2005「鈕文樣を持つ鏡について」『立命館大學考古學論集』Ⅳ
樋口隆康 1979『古鏡』，新潮社
平尾良光・早川泰弘・金正耀・トム･チェイス 2001「古代中國青銅器の自然科學的研究」平尾良光編『古代東アジア青銅の流通』，鶴山堂
馬渕一輝 2017「獸首鏡の系譜 ── 後漢後期における廣漢と華西を中心に」『中國考古學』第 17 號
馬淵久夫 2014「漢式鏡の化學的研究（4）── 後漢中期以降の漢三國晉鏡の原材料產地」『考古學と自

然科學』第 66 號
馬淵久夫 2017「漢式鏡の化學的研究（6）── ミシシッピバレー型鑛床鉛の產地」『考古學と自然科學』第 61 號
馬淵久夫・平尾良光 1987「東アジア鉛鑛石の鉛同位體比 ── 青銅器との關連を中心に」『考古學雜誌』第 73 卷第 2 號
森下章司 2011「漢末・三國西晉鏡の展開」『東方學報』京都第 86 册
森下章司 2012「華西系鏡群と五斗米道」『東方學報』京都第 87 册
森下章司 2016a『五斗米道の成立・展開・信仰內容の考古學的研究』科學研究費基盤研究（B）研究成果報告書
森下章司 2016b「神獸鏡と黃帝・玄女」『古文化談叢』第 77 集
森下章司 2017「鍍金同向式神獸鏡」『千石コレクション ── 鏡鑑編』兵庫縣立考古博物館加西分館・古代鏡展示館

【中文】ピンイン順
崔慶明 1982「南陽市博物館館藏紀年銅鏡」『中原文物』第 1 期
貴州省博物館考古組 1973「貴州平壩馬場東晉南朝墓發掘簡報」『考古』第 6 期
湖北省文物考古研究所・隨州市博物館・曾都區考古隊 2022「湖北隨州廟臺子遺址西周遺存發掘簡報」『江漢考古』第 1 期
金正耀・馬淵久夫・Tom Chase・陳德安・三輪嘉六・平尾良光・趙殿增 1995「廣漢三星堆遺物坑青銅器的鉛同位素比値研究」『文物』第 2 期
金正耀・朱炳泉・常向陽・許之咏・張擎・唐飛 2004「成都金沙遺址銅器研究」『文物』第 7 期
黎海超・崔劍鋒・周志清・王毅・王占魁 2018「成都金沙遺址星河路地點東周墓葬銅兵器的生產問題」『考古』第 7 期
魏堅編 1998『內蒙古中南部漢代墓葬』，中國大百科全書出版社
西安市文物保護考古所 2009『西安東漢墓』，文物出版社
楊小剛・鄒後曦・金普軍・趙叢蒼・凌雪・南普恒 2013「重慶地區出土青銅器鉛同位素比値研究」『文物保護與考古科學』第 25 卷第 3 期
鄭州大學歷史學院考古系・河南省文物管理局南水北調文物保護辦公室 2009「河南新鄉市金燈寺漢墓發掘簡報」『華夏考古』第 1 期

【英文】
Dewar, Susan ed. 1994 *Bronze Mirrors from Ancient China, Donald H. Graham Jr. Collection,* Hong Kong
Yeung *et al.*（Catherine YEUNG, Yoshimitsu HIRAO, Raymond W. M. KWOK, Peter Y. K. LAM, S. P. WONG, S. K. HARK, K. K. MARK）2002 Lead isotope ratios of Ancient Bronze objects from Southern China, *BUMA*（Proceedings of the Fifth International Conference on the Beginnings of the Use of Metals And Alloys）-V